

臍癌は全例切除不能、しかし9例に何らかの内瘻化術式が施行された。臍炎を含む臍疾患の術後短期予後が最も悪く、その多彩な病態を中心に MOF の前段階としての DIC には少なくとも4つ亜型 (ARDS 型、急性腎不全型、DIC (狭義)型、AGML 型) が想定された。

以上過去7年間の症例の実態からも外科紹介時全身状態不良例に対する早期開腹術の余地は慎重な配慮 (術式選択、術後管理) 下では依然あると思われた。

30) 人工臍島 (GCIIS) の使用経験

富山 武美・加藤 英雄 (新潟大学)
塚田 一博・吉田 奎介 (第一外科)
武藤 輝一

人工臓器としての人工臍島は、いまだに完成された物ではない。しかしながらベッドサイドでの持続血糖モニターと、インスリン分泌のアルゴリズムに近似させたインスリン注入のプログラムを有する Glucose Controlled Insulin Infusion System (GCIIS) が開発され臨床で使用されている。今回我々は3例の臍全摘患者と triopathy を有した2例の重症糖尿病患者の術後血糖管理、1例のインスリンノーマの術中血糖測定の計6例に GCIIS を使用する機会を得た。重症糖尿病症例、臍全摘症例ではインスリン感受性の変動の著しい術直後の血糖管理を安定して行うことが可能であった。インスリンノーマの術中局在診断の補助診断としての有用性と術直後のインスリン感受性の変化につき症例を呈示して報告する。

31) 食道静脈瘤に対する治療法の変遷と今後の問題点

清水 武昭・高木健太郎 (信楽園病院)
大村 康夫 (外科)
長谷川 滋・加藤 英雄 (新潟大学)
十屋 嘉昭・新国 恵也 (第一外科)
塚田 一博・吉田 奎介

最近10年間に、食道静脈瘤に対し治療を行った症例は72例であった。原疾患は特発性門脈圧亢進症12例、肝硬変症58例、原発性胆汁性肝硬変症2例で、男性35例、女性27例であった。出血例は53例で大半を占めた。食道静脈出血29例、胃静脈出血2例、潰瘍出血6例、急性胃粘膜病変出血7例、複合9例であった。治療としては手術療法34例、残りは内視鏡的食道静脈瘤塞栓術であった。手術療法の内訳は、経胸的食道離断術12例、東大2外法7例、Hassab 変法手術7例、シャント手術4例、胃上部切除術2例で、緊急16例、待期9例、予防7例であった。内視鏡的食道静脈瘤塞栓術では1回施行16例、2回

施行15例、3回施行9例、4回施行5例、5回施行2例、6回施行2例であった。

初期の頃緊急例には経胸的食道離断術を行っていたが、最近では内視鏡的塞栓術を行い、止血困難例にシャント術等を行っている。

32) DIC とその準備状態における腎機能検査の再評価

小柳 隆介・大黒 善弥 (燕芳災病院)
榊原 清・藤 洋吐 (外科)

過去5年間で10例の DIC 症例を経験し、その経過を DIC スコアと呼吸機能、肝機能、腎機能と対比検討して興味ある知見を得たので報告する。対象は腹膜炎3例、外傷手術後4例、急性臍炎2例、広範囲熱症1例である。全例男性で21才から81才、死亡4例、生存6例であった。死亡例を中心に検討すると4例とも全く異なるパターンをとった。症例1は81才男、腹膜炎、DIC スコアの上昇と呼吸機能、肝機能、腎機能の下降がきれいに逆相関する MOF 型。症例2は68才男、急性臍炎、DIC スコアは改善したが肝機能、腎機能が悪化した肝腎型。症例3は54才男、癌性腹膜炎腸管穿孔で DIC スコアの直線的な上昇と、肝機能、腎機能が緩やかに低下した末期癌型。症例4は、66才男3度80%熱症、DIC スコアは改善したが腎機能のみ悪化した腎型であった。それに対し生存例は肝型1例、肝腎型5例であった。いずれの症例でも腎機能検査は末梢循環状態をよく反映した。

33) 正中腹壁ヘルニアの一治験例

大坂 道敏・大矢 明 (亀田第一病院)
(外科)

正中腹壁ヘルニアは、まれな疾患で、報告によると全ヘルニアの0.4~0.8%とされている。今回、私達はこのヘルニアの一例を経験したので、若干の文献的考察を加え、報告する。

症例は、34才の男性で、主訴は上腹部痛及び上腹部腫瘤で、初診時には同部に腫瘤を触れず、Litten's sign が認められたため上記診断を疑い、全麻下に手術を行った。開腹所見では、臍の約5cm 上方に径約3cm のヘルニア嚢を認め、これを周囲組織より剝離したうえ、切除した。切除標本では、先端部分に Lipoma 様の腫瘤が認められたが、組織学的検査では、異常所見は認められなかった。

このヘルニアは、無症状例が多いとされ、今後よく検索すればもっと多くの症例が見つかるものと考えられる。